Webサイト　Twitter

Exhibit at the 1st Kumadai-Hub Poster Session

Kumadai-Hub座談会

今、Kumadai-Hubが面白い！「ゆるいつながり」から生まれる他にはない新しい動き

若手の研究者が集まり、分野を横断して交流する場「Kumadai-Hub」。

研究者を中心に技術職員、事務職員、学生など大学を構成する様々なステークホルダーが集まり、交流や情報共有を楽しむ中で、共同研究などの新しい取り組みも生まれています。

なぜ、Kumadai-Hubは生まれたのか、今後なにを目指していくのか、メンバー6人が語り合いました。

2022年10月に開催したポスター展には小川学長も来場しました

キャンパスや分野にとらわれない自由な交流の場を目指して

滝澤　Kumadai-Hubは、「自称」若手研究者を中心とする有志の組織です。「自称」としたのは、「若手」の定義があいまいなためで、メンバーは「フレッシュな気持ちを持っている人」として集まっています。ですから実際には20代の学生から50歳を超える教授まで、日本人も外国人も、色々な人がいるんです。

研究者が自分の専門領域や研究室に閉じてしまいがち、学生も隣の研究室が何をしているか分からない、ということは実は大学では珍しいことではありません。また、「研究者」、「事務職員」、「学生」などカテゴリで線が引かれているというか、大きな溝があることを日々感じます。同じ熊大で働く者、研究を志す者同士、もっとお互いの特長を活かして、熊大を盛り上げることができないかと考えていました。Kumadai-Hubに参画している人たちは、こうした思いに共感している人が少なくないと思います。

壁を壊し、つながる場としてのKumadai-Hub

佐田　私は2019年の10月に着任しました。当時は他の先生のことを知らなくて。そんな時「勢いのある若手の研究者を集めてざっくばらんに話をしよう」と滝澤先生に紹介してもらった10人程度に声をかけました。2019年12月でした。同世代で、同じような課題意識を持った若手研究者たちがいろいろな話をすることで、Kumadai-Hubの芽が生まれたんですよね。

日本の大学はキャンパスや分野を超えた交流が弱いと思っていたので、そんなことができる場ができたらと思ったんです。何度か集まるうちに、集まる場はみんなが自由に意見交換する場になっていきました。とてもいい場だし、いろんな人に知ってもらいたくなって、この動きを外に向けて可視化しようということに。その動きの1つとして2020年1月1日からTwitterを開設。1年後には、情報交換の場としてSlackグループを立ち上げました。当初は生命系、特に本荘キャンパスの人がほとんどでしたが、黒髪キャンパス（人文社会系、理工系）にも興味がある人がいる、という話を聞いて、いろいろな人に声をかけ、ようやく熊大全体に広がってきた感じです。

滝澤　見回してみると、団塊世代の研究者が退官し、医学部、理学部、工学部にも若い先生たちが多く入ってきていました。そんな研究者は熊本外から来ている人が多いのに、熊本の情報がなかったんですよね。それもKumadai-Hubを作るきっかけの一つです。子どもを預けるにはどうしたらいいかとか、学生にどう対応したらいいかとか。そういう根底にあったニーズに対応していたら、研究に関する情報交換や共同研究に広がったのかな。研究者は研究室という閉ざされた空間で研究しています。研究室にいる人が誰かも知らなければ話したこともない、ということもあるくらいです。そうなると新しく

熊本大学大学院先端科学研究部
助教
メンドンサ・ドスサントス・イスラエル

熊本大学国際先端医学研究機構（IRCMS）
特任准教授
Kumadai-Hub発起人
佐田 亜衣子

熊本大学国際先端医学研究機構（IRCMS）
特別招聘教授・副機構長
Kumadai-Hub発起人
滝澤 仁

これはアンチテーゼ。コロナで社交ができない、研究者は忙しい。でも集まれば、こんなことが起こるということを提示したい

滝澤

来た先生方は情報を得る手段がない。特に、世界に見える研究をやろうとしたら、そういう状況ではできません。次第に、そんな状況を打破し、壁を打ち破るというのがKumadai-Hubの大きなテーマになっていったなと思います。

自由に好きに交流でき迷いや悩みも話せる良さ

西川　文学部は個人が研究室で自分の研究を進める形が多いんです。それぞれの研究者が何をしているかもわからないので、寂しいなと思っていました。そんなとき、Kumadai-Hubの話を聞いて参加しようと思いました。熊本に来て2年目くらい。他のキャンパスのことも知りたいなと思っている時期でした。軽い気持ちで「のってみようかな」と思って参加したのがきっかけですね。

文系の人でも興味を持っている学科の人や研究者が他学部にいるという場合は、世界が広がると思います。違った方法であっても同じテーマで研究している人もいるし、違うアプローチで同じような研究をしている人もいる。自分では調べたり知ることができないことを、交流することで知ることができたかなと思っています。

佐藤　私は滝澤先生に誘われてHubに参加しました。当時、同期の研究者が研究の世界から身を引くという話をよく聞いていて、自分もどうしようかと考えていた時期でした。そんなときに相談できる同僚やコミュニティーがあればと思って飛び込んでみたわけです。すると医学部や薬学部だけでなく、黒髪地区の様々な学部の方たちとつながることができました。参加されている皆さんの研究への姿勢には刺激を受けることも多く、あのタイミングでHubに参加してよかったと思っています。研究のあれこれ、小さな不安や悩みのある人に、Hubはゆるく繋がれてフランクに話ができる場を提供しています。興味のある方はぜひHubを覗いてみてほしいですね。

メンドンサ　私が参加したのは熊本に来て間もないころ。知っている人も少なく、話したいことも話せなくて。そんなときにHubの話を聞いて参加したんです。別の学部の先生もいて、熊本大学が何をやっていてどんな人がいるのかが分かるようになり、私の研究はどうすればより多くの人の役に立つだろうかと考えるようになりました。

私が熊大に来て思ったのは、先生も交流した方がいいということ。学生には交流しなさいと言っていて合宿させたりしている。でも学生より長く大学にいる先生たちはなぜやらないのか。研究者は忙しいので交流する時間がないというのも本当です。でも、ちょっと時間を作って楽しみながら

IRCMSリサーチ・アドミニストレーター
熊本大学大学院自然科学教育部博士後期課程2年
Kumadai-Hub発起人
坂井 華海

熊本大学大学院生命科学研究部
助教
佐藤 叔史

熊本大学大学院人文社会科学研究部
准教授
西川 里織

先生ももっと交流したほうがいい。そこから生まれるものがある

メンドンサ

話しましょう、というコンセプトのHubなら、楽しく交流できます。

坂井　私は立ち上げのときから参加しています。最初は、研究者のサポートと思って、ボランティアで議事録を書くところから始まって、いつの間にか今の立場になっていました。私は学生でもあるので、Hubのイベントに学生に参加してほしいと思ったら「学生はどうしたら参加したいと思ってくれるだろうか」とか「こういうメリットがあるから参加したいと思うだろう」と考えることができます。また、リサーチ・アドミニストレーターでもあるので「報告書的にこういう内容がほしい」とか「助成金をもらうためにはこういう内容があればいい」などがわかります。さらに、いつも先生たちと一緒にいるので、研究者がどんな考えを持っているかもわかると思うんです。それぞれの立場を考えながら参画できるのは、自分にとっても、Hubにとってもいいんじゃないかと思っています。

研究者は学生に教えたり啓発するだけでも大変。だからこそ研究マネージャー職である私は、通常オーガナイズや中間者としての役割を行っています。Hubは「忙しいからできないというのでは新しいことは生まれない」という意識から生まれたと思っているので、事務的な部分や調整の部分を担いつつ、対等な立場で話を持っていくのが私の役割かなと思っています。

Hubの良さは、みんなが好きに言いたいことを言って、その中から何かできそうというアイデアを見出していくところ。そのゆるさや柔軟さがあったからこそ続いてきたし、広がり続けているのだと思います。

つながりから生まれた新しい研究も

西川　ここでできたつながりから研究の広がりも生まれていますよね。私は、科研費の申請を一緒にやることができました。私は文学部で心理学を研究しています。研究を深めるためには医学系か生物学系の方の専門家が必要でした。倫理委員会の審査などは文系からの申請はとてもハードルが高くて。どうしようと思っていたら、ここで知り合った医学部の先生にお手伝いをしてもらえて道が開けたんです。とても感謝しているし、来てよかったと思っています。自分だけでは越えられなかった壁が越えられたんですから。

メンドンサ　私も昨年、他学部の先生と一緒にプロジェクトを行いました。

工学部と医学部の2名の先生との4人のプロジェクトです。文学部の先生とも共同研究に取り組んでいますが、最初から明確な目的があって出会ったとかプロジェクトを始めたというよりは、話をしているうちに「何か一緒にできそう」となるんです。

行き詰まっているとき参加したらちょっとすっきりできた

西川

ポスター展前のミーティングには多くのメンバーが参加し、来場してもらうための様々なアイデアを出し合いました。

定期的に開催されるミーティングは和やかな雰囲気の中活発な意見が交わされます

研究の楽しさを若い人たちに伝えていくのが自分の使命で役割だと思う

佐藤

Hubは「来たい時に来ていい」となっているので偶然の出会いがあります。

坂井　リサーチ・アドミニストレーターとして相談を受けてマッチングをすることもありますが、実際に会って話さないと先方がコラボレーションの希望があるかどうかはわかりません。でも、Hubに出てくる人はコミュニケーションを求めている人。その前提があるので相談もしやすいし、話もしやすいんです。顔を見て話すことで、人柄もわかるし、相性が合うかも確認できる。そのためにもHubのような場は大事なんだなと思います。共同研究など、交流の中から生まれた形が見え始めているのはとてもうれしいのですが、逆に成果を求められてしまうと、Kumadai-Hubの良さはなくなっていく気もしています。ゆるやかなつながりの中で成果を求めずこの場を続けていくこと。来たいときに来て、無理をせずにつながっていくこと。これがHubの価値かなと思っています。参加することが義務になりプレッシャーになってしまったら続かないですよね。

滝澤　成果の前に人と人の絆、同じ場所で同時期に研究をやっているということが大事なんじゃないかな。研究って医学系に関しては、結果が出るまで5〜6年くらいかかる。でも研究費をとれる道筋ができたという話があったけれど、それこそが研究のスタートなんです。そういう意味では、今後少しずつ、このグループの成果や意味みたいなものが出てくるのではないかと感じています。

研究を「話す」機会になったポスター展の開催

佐藤　ポスター展は、Hubの活動がカタチとして見えた大きなイベントでしたよね。コロナがまん延する中、学会にも行けない、学生さんたちの発表の場もない状況でした。周りの人に知ってもらう機会がない中で、発表の場を提供しようと。さらに、横のつながりを作りたいということで、今回の企画が始まりました。約2時間のイベントでしたが、準備はとても大変でした。でも、時間が短かかったという意見があったくらい盛り上がりました。

佐田　学長も来てくれてちょっとうれしかったですね。ウクライナの方がウクライナ基金もやってましたね。

佐藤　やってみて気づいたんですが、分野が違うと思いの外、自分の研究をうまく説明できないんです。自分は分かっているつもりでも、専門用語の使い方に悩んだり、説明の仕方を変えたりと試行錯誤が必要なんです。自分の研究だけでなく、異分野をいろいろ見るのは大切だと気づかされました。

坂井　アンケートでもそんなコメントがありました。「ポスターの内容を見て、同じテーマの研究でもこんな方法があると知ったのでこんど自分もやってみようと思う」などのコメントが寄せられました。他にも「参加しなければ気づかなかった」という意見も多く、まず場を作ってお互いを知るということが、説明能力も含めて大事だと感じました。

佐田　そもそも文系と理系では研究のやり方も大きく違いますよね。理系だと英語で論文を書いて、雑誌に投稿して、というのがスタンダード。でも分野が違えば英語で論文を書くことがない、とか。そもそもの価値観が違うから取り組もうとする問題も違うな、とか。そういう視点の広がりを感じると、世界が狭かったなと改めて認識させられます。社会を見渡す力をつけて視野を広げるという意味でも、いい機会になりました。

坂井　ポスター展は黒髪キャンパスで開催しました。Kumadai-Hubは生命系から始まったので黒髪キャンパスではあまり知られていないんですよね。だから、黒髪キャンパスの人にHubに参加してもらうためには、私たちの存在に気づいてもらわないといけない。だったら黒髪でやろうと。結果、実際に黒髪キャンパスの人の参加も多く、Hubに入りたいという人も圧倒的に多かったんです。

　また、市民に研究を知ってもらうという機会にもなりました。研究については、市民参加があってその場で実験に参加してもらうきっかけになりそう、とか。熊大を知ってもらうためにもよかったんじゃないかと思います。

　新しいアイデアも生まれたみたいです。参加した人にアンケートを取ったんですが、工学部でセンサーの研究をやっている先生から、参加者にセンサーを配ってはどうかという意見も出ていました。みんなが会場内でどういう動きをしていたかがわかると、どんな研究に興味を持ってもらったかなどがわかって面白いですよね。

滝澤　ポスター展自体がHubの役割になって、実験の場にもなるのはいいアイデアだよね。Hubとしての機能を見える化できるかもしれないし。

坂井　今回、ポスターづくりでも工夫しましたよね。話し合いの場で西川先生から「ポスターを作ったことがない分野の人はどうしたらいいのか」という質問が出て、モデルを作ったんです。アンケートでも「様式があったのでわかりやすかった」とか「図を必ず入れるというサンプルがあったので、遠くから見ても研究内容がわかるものにできた」という声がありました。

　今回は、英語のポスターや日本語のポスターなど言語の統一はしませんでしたが、次回は、両方にどのように対応するかを課題にしたいと思っています。

西川　自由に作っている人もいて、それもよかったですね。ポスターで説明するんじゃなくて、会場で自分で説明するためのポスター。ポスターづくりにハードルを感じる人にはいい例になったと思います。

腹を割って話せる人間関係をHubの良さにしていきたい

坂井

第1回 Kumadai-Hub巡回ポスター展

●2022年10月3日
熊本大学黒髪キャンパス 工学部100周年記念館

●分野を超えて約40枚のポスターが展示され、多くの方に来場いただきました。

なったと思います。

坂井　参加者は研究者と学生が多かったんですが、技術職や事務職の人も来てくれて、会場設営や備品調達などを手伝ってくれました。自主的にやっているとはいえ、協力してくださる人がいないとできないというのも確か。そういう意味では、有志の職員が熊大にもいるということを知る機会にもなりました。

ゆるやかにつながりつつ熊大の良さを可視化したい

佐田　私は熊大の良さを可視化してきたいとずっと思ってきました。熊大は研究者同士の仲がいいし、研究のレベルも高い。それが周りから見えていないんですよね。アカデミアの自由な雰囲気を少しずつでも外に見えるようにすれば、日本全体に広がっていくかもしれないし、広がってほしい。大学は自由な場所だし、研究は楽しいと伝えるのに、Kumadai-Hubがその先駆けになればと思っています。

メンドンサ　積極的にいろんなイベントを企画したいですね。自由にやってくださいと言われてますし、とにかく楽しんで交流することが大事だと思います。

　真面目なこともやりながら、こういう交流も楽しめるのがHubのいいところ。今後は合宿をやりたいとも思っています。会議室ではないところで、美味しいもの食べたりゆっくりしたりしながらフリーでしゃべることで解決することがたくさんあると思います。研究というテーマでもやってみたいですね。

坂井　楽しいと思ってやることは本当に大事ですよね。この場に来ることも、企画して実施することも楽しいと思ってほしいです。また、何をやるにしても、対話にもとづいて、「こういうのがいい」と言えるゆるさと弾力性が大事だと思います。腹を割って話せる人間関係を築いていくのは、研究者になるから必要なものではなく、人間として社会に出ていっても必要なこと。

　Hubをそんな人間関係ができる場にしていきたいと思っています。

誰もがフリーで議論できるサロンのような場に

滝澤　フリーで議論するというのは、Kumadai-Hubの大きなキーワードだと思っています。ヨーロッパにはサロンという社交の場があって、権力者や哲学者、音楽家、科学者が集まり議論していた。同時期に哲学から数学、数学から物理と同じ概念が違う分野で花咲いてきたという歴史があります。そういうものをやりたいと前から思っていました。みんながそういう目的で集まっているわけではないでしょうが、話しているうちにピンときて、インスピレーションをもとに研究していけば、新しい分野、学問が生まれるんじゃないか、という期待は持っています。一人ひとりの研究者がやっていることは小さい宇宙ですが、僕らは人間社会の一部。熊大のコミュニティがあって、町の人たちがいて、そういう人たちに貢献することが還元することであり、それが非常に大切なんです。

　僕らは世界市民なので、国境をまたいで移動しながら、研究を啓蒙していくという活動をもっとやっていく必要もあります。今後は、世界のさまざまな人たちとゆるく楽しみながらつながりたい。その一つの形としてKumadai-Hubのスタイルが全国、世界に広がっていくのもいいなと思っています。

若手研究者はみんな追われている。だからこそもう一度、自分たちは何ができるのかを思い出して、発信したい

佐田